

「ドイツ」、ワイマール、バッハ、

ドイツ的発想のことども

慶應義塾大学経済学部教授 鈴木 威

3月25日の当湘南日独協会の例会は「バッハ・アフタヌーン」とのサブタイトルつきだそうなので、当日の臨席者の大方に関心のありそうな標記のテーマについて、次に記すような概要の講話を私は考えている。

まずは、「ドイツ」の版図の事実認定であるが、ドイツにはドイツ人自身がミッテルオイローパ(英語訛り[イングランドの語源はゲルマン部族の一つアンゲルンであるから]ではミッドルユアロップ)と呼んでいるくらいだからヨーロッパ州の中央に位置するのはよいとして、また、近々「ドイツ」が昔のカール大帝(英語訛りチャールズ大帝、仏語訛りシャルル・マーニュ)のフランク(仏語訛りフランス)王国なみのスペインからハンガリーまでの「ヨーロッパ連合」に発展解消する将来のこともさておき、今日、旧東西両ドイツの統一したブンデスレプブリーク・ドイッチュラント(霞ヶ関用語ではドイツ連邦共和国)が、大方のイメージする「ドイツ」の版図であると思うのだが、この第二次大戦中のナチスドイツは、通史では「第三帝国」と呼ばれていた。ということは、これに先だって「第二」、「第一」と遡って考えてゆくのドイツ人好みの「理性の要請(ポストウラーテ)[数学でいう公準]」というものであろう。そう、「第二帝国」とはサンズーシのフリードリッヒ(英仏訛りではフレデリック)大王や鉄血宰相ビスマルクで有名なプロイセン(英訛りプロシヤ)であり、ということは「第一帝国」は中世を通じてヨーロッパを支配した、かの神聖ローマ帝国(ゲルマン族の一部族ザクセン(英訛りサクソン)の当主オットー一世がローマ教皇[ヴァチカン]から西ローマ帝国になぞらえて、俗界棟梁[日本史流にいうなら征夷大將軍か]に任ぜられて(800年)以来ゲーテやベートーベンの時代すなわち19世紀初頭のナポレオン戦争によってウィーン・ハプ

※裏面へ続く

湘南日独協会 2000 年度活動予定

★5月20日(土)

講演会「ハプスブルグと現代」

講師 西沢英男氏

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F・ロータスホール

会費 会員 2,000 円(当日払・茶菓付き)

一般 2,500 円(当日払・茶菓付き)

※当日は講演会終了後ドイツワインの賞味会を実施

★7月29日(土) 2000 年ドイツフェア

会場 湘南ホテル

★9月26日(土) 未定 ★11月25日(土) 未定

4 月の会員懇話会！

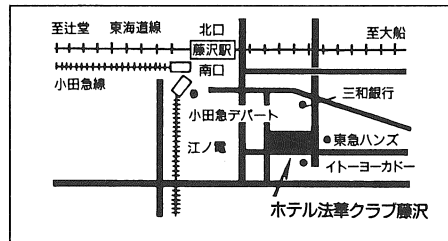
湘南日独協会では隔月で会員懇話会を開催しております。あなたも是非ご参加下さい。

日時 4月22日(土) 午後6時～8時

会場 ホテル法華クラブ藤沢店 2F

レストラン「ヴェルデ」ローズルーム※※101

費用 各自自弁です。



湘南日独協会会報(Der Wind)

VOL 2. NO. 2. 通巻 8. 発行 2000. 3. 25.

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0055 藤沢市南藤沢 8-9 中丸ビル 2F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

湘南日独協会 会報

Der Wind

(風)

湘南日独協会 第8回例会

バッハ没後 250 年

バッハ音楽に親しむ午後

フルート、チェンバロ、弦楽四部による

今年はバロック音楽の巨匠バッハの没後 250 年に当たります。これに因んでバッハの名曲の数々を取り上げてコンサートを開催します。



★司会 前川朋子

★お話 鈴木 威

★演奏 新井力夫(フルート)

勝部裕子(チェンバロ)

湘南エールアンサンブル

★日時 2000 年 3 月 25 日(土) 午後 2 時開演

★会場 鎌倉恩寵教会

※表画より続く

スブルクのフランツヨーゼフ帝が退位に追いこまれるまではほぼ1ミレニアムに渡ったあの「神聖ローマ帝国」のことである。

さて次に、ヨーロッパの自然地勢を概観する時はエルベ川の川筋に注目すると便利である。ドイツは日本でいえばオホーツク海から樺太などの緯度に位置する「寒帯」のため、経済的生産性の低い第一次産業中心の時代にはGDPの低い後進国であったが、幸い、ハンブルグからザクセン地方を通り、チェコのプラハでモルダウとなってズデーテン越えをしてオーストリア・リンツ方面へ向かうこのエルベ川以西は、大西洋をアメリカからはるばるブリテン島を洗いにくる〔メキシコ〕湾流のお陰で西海岸式海洋性気候の「温帯」区分に入り、ために、「近世」(ルネッサンス)から「近代」(モデルネ〔市民革命後〕)に至る工業化のための体力作りは英独仏伊のいわゆる「西欧」は、ポーランド、チェコ、ハンガリー、ロシアのエルベ川以東の「東欧」より近代化への離陸がスムーズに済んだ事実がある。

さて、プロイセンの首都はベルリンであったが、このベルリン宮廷のホーエンツォレルン家は絶対君主家であったにもかかわらず、神聖ローマ帝国のブランデンブルグ選帝侯時代から代々、理性を重んずるフランス啓蒙主義(ヴォルテール、ディドロ、エルヴェシウス、ルソー等、反王制の志士たち)をその帝王学に取り容れる器量の大きさがあった。そのため「理性の要請」のままに「自由、平等、私有財産制」という市民革命につきすすむ恐れなしと言えぬ啓蒙文化人ヘーゲル、ゲーテ、シラー、ヘルダーといった論客を自国内のアカデミーに配置し、ベルリン大学やイエーナ大学、そして血縁のザクセン・ワイマール公国の首都ワイマールなどが、下からの市民革命のなかったドイツの近代化の旗手になりえたのであった。19世紀前半のドイツ文化古典期にはザクセン・ワイマール公子カール・アウグストがゲーテ、シラーを招聘して手厚く遇したが、ひとり公子に限らず、皇太后アンナ・アマリエも公子に負けず劣らず舞台芸術への肩入れは盛んで、宮廷チャペルなどには閑村の趣漂うワイマールには過ぎたほど立派なオルガンが備えられていたといわれている。

さてバッハがワイマールの宮廷オルガニストとして迎えられたのは、残念ながら、ゲーテ、シラーのワイマール最盛期から50年以上も前のことではあるが、このザクセンの地のイエーナ、ライプツヒの自由文化人の出入り多い、質的に国際都市たるワイマールはバッハを大きく育てたといわれている。元々バッハの生まれたザクセンのアイゼナッハという閑村には、のちほどゆっくり語らなければならないマルティン・ルターが、彼の宗教改革という業績に優るとも劣らない、ギリシャ語聖書独訳という仕事を晩年数十年にわたって缶詰になって勉強した館、有名なワルトブルグの古城があって、今日なお世界中の観光客を集める目玉になっているが、ルッターは賛美歌の改革にも手を染めた巨人である。それまでの教会カンタータが単旋律に伴奏が付くという初期ドイツ・バロック風だった音楽を、ヴィヴァルディー式の、イタリア・バロック風の和声を駆使した音楽に変わってきていた。特にルター主義の影響力の強かったこのザクセン・ワイマールでは、18世紀初頭(バッハのワイマール奉職は1708年)すでに合理的な分析技法を用いた多声技法に大衆の関心が移っていたことも、わずかに半年たらずのワイマール体験が、のちにバッハ学者にワイマール期をバッハ「オルガン曲の時代」と言わしめたようである。バッハがワイマールの次に奉職するケーテン時代にはブランデンブルク協奏曲やチェロやヴァイオリンの独奏曲を輩出して晩年のライプツヒ巨匠時代の片鱗を見せ始めるが、これもワイマール体験の結実とみるのが大方の傾向である。

さて、マルティン・ルターの名が出たついでに、ドイツの精神史の底流に通奏低音よろしく響いてくる神の観念について一通りお話ししてこの講を閉じよう。

ヨーロッパのキリスト教は、①〔天にまします命令者としての〕「父」と②〔キリストなる、地上に遣わされた〕「子」と、③〔両者の「息吹」ないし「言葉」たる〕「霊〔ガイスト〕」の三つの位格(ペルソナ)を統一する三位一体神を信奉する。このうち、森羅万象の渦巻く大自然の創造にかかわる「神」は霊ガイスト

(英訛りゴースト)であるが、この大宇宙(マクロコスモス)を司る神聖な霊ハイリッヒガイスト(聖霊)は、ドイツ観念論の始祖カント先生によれば、「物自体」であって「概念(ベグリフ〔ベグライフェン(把握する)から派生])」的には把握できない、即ち人間的言語では語れない「何か」と言い、しかしドイツ観念論哲学の集大成者ヘーゲルはこれに「世界精神」という名を与え、ゲーテはこれを「地霊」と呼んだ。ヘーゲル流にこれを解説すれば、聖霊位は余りにも純粹(抽象的)すぎて中身空っぽの「空」であると同時に内容豊か(色とりどり)な自然としても現象してくる。その意味では禅思想の「生産的空」と、聖霊を翻訳してもよいのかもしれない。聖霊は抽象的なままだと空で終始してしまうので、内容豊かな自分を求めて自己分裂を繰り返して天地創造をする。被造物である人間(ミクロコスモス〔小宇宙〕)の心の内にも霊(精神〔ガイスト〕)は降臨しているため、人間にだけは神の意志(みこころ)が聞こえるはずである。鼓膜が物理的な空気の振動を聞く(ヘーレン)ように、人間は「理性」(名詞フェアヌフトは、動詞フェアネーメン〔傾聴する〕から派生している)は神の「吐息」を聴き識る精神機関であり、道徳家にとっては「父」の命令を受けてたつ「責」になったり、自然科学者にとったら「力は質量と速度の積である」(ニュートン)とか「 $E=mc^2$ 」(アインシュタイン)、また、「空間のひずみから物質は生まれる」(ホーキング)という命題の要請(公準)になったりする宇宙の原理なのである。

このドイツ的理性観に慣れていないと、ライプニッツのモナド、カントの純粹理性、ヘーゲルの実体、ゲーテの諦念、ショーペンハウアーの意志、ニイチェの権力意志、ハイデッガーの諦念的聴従といった賢者の最深の観念、これら最も「ドイツ的なもの」がみえなくなってしまうのである。

一了一

BACH